ヘルマン・ホフマン初代学長　No. 34

1．ホフマン初代学長

上智大学の初代学長は、ドイツ人イエズス会員、ヘルマン・ホフマン（1864－1937）である。1910 年に来日して以来、校地の取得や設置認可のための文部省との交渉など、開学のために奮闘した。

開学後には大学が直面した試練に立ち向かっただけでなく、熱のこもったドイツ語等の授業を行い、学生一人ひとりの教育のために生涯を捧げた。陽気な性格でウィットに富み、学生たちに非常に慕われて「おやじ」と呼ばれていた。

それを象徴するのが、現在正門近くにある胸像である。これは 1936 年 10 月に入院したホフマン学長の快復を願う卒業生たちが献金し、1937 年 5 月に建立したものだ。残念ながら学長自身は除幕式には出席できず、約 2 週間後の 6 月 1 日、72 歳で帰天した。亡くなる 3 ヶ月前には、初代学長としての功績が称えられ、昭和天皇から銀杯を下賜された。

存命中に建立されたホフマン初代学長のブロンズ像
（1937 年 5 月 16 日に除幕式、1 号館裏）

ホフマン学長は、1864 年 6 月 23 日に、ドイツのライン地方、エルベルフェルトに生まれ、16 歳でイエズス会に入会した。オランダやオーストリア、イギリスで哲学と神学を学び、オランダのファルケンブルク大学で哲学教授として活躍した。

イエズス会本部の命を受け来日したのは 1910 年、45 歳の時だ。それから日本語を学び、獨協学園（現・獨協大学を運営する学校法人）でドイツ語を教えながら、上智大学開設のため尽力する。冊子『ホフマン先生のおもいで』（1957年、東京ソフィアクラブ）には、校地の登記に行ったところ登記所で本当に資金が有ることを示すよう求められたため、横浜の独逸東亜銀行で 43 万円（現在の物価に換算すると約 4.6 億円）の小切手を発行させたという逸話が、ホフマン学長の口述として残されている。また、学校認可のために文部大臣に面会した際には学校運営に関して外国からの命令で動くのか問われ、「私は学長としては、誰とも同じように政府に対して責任を負う、しかし上長に対する関係は、私個人の問題である」と説明し、大臣が納得したという。

2．教育者としてのホフマン学長

1号館でのドイツ語の授業

ホフマン学長はドイツ語を教える仕事を最も好み、冗談を交えながら難しいドイツ語の勉強も愉快なものとした、と同僚だったヨハネス・ラウレス神父は『ホフマン先生のおもいで』に記している。休暇になると退屈になったため、熱心な学生 2-3 人を呼んで個人教授をしたとも述懐している。

教え子の一人である内藤邇氏によると、ホフマン学長は入学する学生一人ひとりの顔と名前を受験票の写真と照合して、最初の授業までに憶えていたという(上記冊子)。宿題も多く、ノートはきちんと訂正して返却。ドイツ語の授業で熱がはいると強く発音する時にツバを飛ばすことがあったが、列の学生たちはそれを「洗礼を受けたようなもの」として気にとめず、教授との親しい関わりを上智の校風として味わったという。

『上智大学五十年史』（1963 年）は、ホフマン教授のドイツ語の授業を次のように伝えている。

「先生は毎朝のようにたくさんの本を小脇にかかえ、太い鉛筆を握り、フロックコートの尾をヒラヒラさせながら本館から職員室へと急ぐ。ベルが鳴ると、間髪をいれず教室へはいるなり、生徒を名指して質問をあびせる。ライオンのように全精力をふりしぼっての授業である。黒板には男性的なドイツ文字が書かれては消え、消えては書かれる。チョークの粉だらけのフロックコートが生徒のあいだに割って入り矢つぎばやの質問。生徒がみんなできれば両手をあげて『バンザイ』と自分ができたようによろこび、できないと両手をたれて自分ができないようにがっかりする。そのときの深く澄んだ、すいこまれるような碧い眼。人格と人格の触れあい。若い心の髄にぐっとくるものがある。一転してこんどはウィットをまじえる。生徒がアハハと笑うころに丁度授業終りのベルがなる。」

ホフマン学長（前から 2 列目右から 5 番目）と開校当時の学生（1914

３．ホフマン語録

上智大学は、開学後まもなく幾多の試練に直面する。財政的な支援を仰いでいたドイツのカトリック教会は第一次世界大戦のドイツ敗戦によって援助の提供が困難になり、1923 年の関東大震災で本学の赤レンガ校舎が半壊。1930 年代には軍部との関わりという難しい舵取りも迫られた。しかし、ホフマン学長は果敢に職務を全うし、大学の存続と発展を確かなものにした。

このように異国の地で幾多の試練を乗り越えたホフマン学長は、今日の人々にも通じる格言を残している。

「金を失っても、失望、落胆することはないが、希望と勇気を失っては、人はすべてを失ってしまう」（『上智大学五十年史』）

晩年のホフマン学長

「寝ていれば、敵がないかわりに、味方もできない。起きて働けば、敵もできるが、味方もできる」（同）

「人間の価値は、その人の得た地位や、いわゆる立身出世の程度ではない。役者のよしあしは、その役割の上下によって定められず、その役割をいかによく、いかに完全に演ずるかによって定められる。人間のこの世における価値も、その職分をいかに良心的に果たすかどうかによって定められる」（同）

「洒落や冗談をいうなら、自分自身についていうがいい。だが、ほかの人については決していってはならない」（1935 年に来日し、上智大学に着任したてのドイツ人、ロゲンドルフ神父へのアドバイス　『ホフマン先生のおもいで』）

ホフマン学長は 1936 年に東京の聖母病院に入院した後も、学生たちのことを想い続けていたといわれている。2 代目学長に就任したヘルマン・ホイヴェルス神父は、「この心底からの親切な人がらが、上智精神というものの基礎をつくった。その精神というのは、理性的であることの、家庭的であることの、無条件的に義務を果たすことの、倫理的理想主義のそれなのである」と冊子に記した。